

性暴力にまつわる誤解



多くの人々が、性暴力犯罪について誤った理解をし、被害者を苦しめています。以下に代表的な「誤解」について解説します。

誤解①：

レイプは夜道で見知らぬ人から



事実：

見知らぬ人より、知っている人のほうが多い

平成 20 年に全国の男女 5000 人を対象に内閣府が行った男女間における暴力に関する調査によると、女性の 7.3% (123 人) が「異性から無理やり性交された経験がある」と回答していますが、その加害者は、「よく知っている人」が 61.8%、「顔見知り程度の人」が 13.8% で、8 割近くが面識のある人という結果が出ています。性犯罪はある程度知っていて、その信頼関係を利用して行うということが一般的なのです。しかし、平成 10 年に当時の科学警察研究所の防犯少年部付主任研究官だった内山絢子さんが、全国の警察署で取り扱った事件について行った調査によると、強姦 (110 件)・強制わいせつ (87 件) 事件のうち、加害者が友人や知人など顔見知りの割合は 15.6% で、見知らぬ人が 78.7% と割合が逆転しています。それだけ知っている人が加害者の場合には警察に訴えにくくなるのです。しかし、実際の性犯罪では顔見知りが加害者である場合が多いということを知っておく必要があるでしょう。

また、顔見知りだというだけでなく、夫や恋人からの被害も多いのです。内閣府の調査でも、加害者が面識のある人だった人 93 人のうち、「配偶者 (事実婚や別居中を含む)・元配偶者 (事実婚を解消した者を含む)」という人が 35.5% と最も多かったのです。このようなパートナーからの被害は夫婦間レイプや DV における性的暴力、デートレイプ、デート DV などと呼ばれています。